(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名　鶴岡賀雄

鶴岡賀雄氏の博士学位請求論文「十字架のヨハネ研究」は、十六世紀スペインの神秘家十字架のヨハネの神秘思想について、一個の斬新な解釈を提出したものである。

まず、第Ⅰ部では、ヨハネの置かれた歴史的文脈や伝記的諸事実(第一章)、主要諸著作の内容（第二章)、ヨハネ思想の基盤である新約聖書やスペイン神秘思想の伝統（第三章）などを述べた後、著者は本研究の方法について述べている（第四章)。それによれば、氏は、テキストの背後にある神秘家の原体験への到達や、なんらかその追体験を目指すことなど、神秘思想研究において生じがちな傾向を自ら強く戒め、あくまで、テキストそのものを、特にその言語的形式に注目しつつ、同時に著者の生きる現代の視点から解釈するにとどめ、また、それに徹するべきだとする。これは、一見、控えめな姿勢とも言えるが、むしろ、厳しく考え抜かれた氏の学問的姿勢と言えよう。

第Ⅱ部では、神の愛と人の（神への）愛の同質性同等性の思想がヨハネの神学の骨格であること（第一章)、ついで、ヨハネがその思想の最終的到達を論理的に述べるとき、自ずとスコラ神学的枠組を越えて行く多くの局面が入念に示され（第二章、第三章)、そして、「暗い夜」という含蓄豊かなイメージによって、ヨハネがいかに多面的に神との合一の体験を示唆しようとしたかが分析される（第四章)。さらに進んで、ヨハネにおいては、西欧一般の伝統とは逆に、能動性よりも受動性が強調されるとの指摘も重要である(第五章)。物理的、心理的、人格的の三レベルからなされるこの受動性の解明は、そのまま、かれの合一思想そのものの解釈への必要な準備作業となっている。

最後の第Ⅲ部では、ヨハネの神人合一思想が俎上に載せられる。すなわち、スコラ神学的言語との対比において、ヨハネが自由な詩的言語たる「イメージ言語」を創造してゆくこと（第一章)、それは、魂の中心と神の中心との重なりのイメージ（第二章)、二つの中心の接触のイメージ（第三章)、神のかげをうつ（映、写、移、遷）すとのイメージ（第四章)、そして最後に、恋人の抱擁を喩えとする、魂の胸での神の目覚めのイメージ（第五章）などから成

ることが、ヨハネの言葉に密着しつつ、また現代解釈学・現象学の成果を援用しつつ、きわめて精妙に分析される。そこでは、魂は神と「ふたり」となって一人称双数形の人称代名詞や動詞を語るに至ることが、ブーバー、バンヴェニスト、レヴィナスらの言語哲学的洞察を受け継ぎつつ説得的に述べられたのである。

以上のように、鶴岡氏の研究は、いわゆる婚姻神秘主義の一典型である十字架のヨハネの思想の現代的解釈として、現在の研究水準を抜くものであり、なお十分な展開が望まれる部分を残すとは言え、今後の研究にとって重要な里程標を打ち立てたものと言える。よって、本審査委員会はこれにたいして博士（文学）の学位を授与することを認める。